

## ドクターNAKAMURAの 健康道場



### Vol.32 後遺症の心配

私、山部聡は脳梗塞超急性期のために血栓溶解療法により九死に一生を得た。家族が見守る中、鉛の板の中に埋まっていた身体が、あたかも氷が融けるがごとくじわじわと動き始める。頭の中は深い霧が晴れるかのように意識がはっきりしてきた。そして、愛する家族佳奈と友子の声ははっきりと脳の深いところに届いてくる。手の温もりも生きている証として感じ取ることができた。ただ、左手足はまだ重い。10kgの手かせ、足かせをされているようだ。

血栓溶解治療後2回目になる脳MRI検査を受けた。「先日の血栓溶解療法により詰まった中大脳動脈領域の血流再開には成功しました。出血性脳梗塞といった合併症もおきていません。しかし、残念ながら、運動領と言語をつかさどる側頭葉の一部に小さな脳梗塞が残ってしまいました。今の状況は不全麻痺といい

ます。左手足が思うように動かないのはそのためです。頑張ってリハビリを行えば日常生活に支障が出ない程度に改善していくでしょう。ただ、もしかすると言葉の認識に障害が残るかもしれません。」いつもながら主治医の崎田が淡々と語る。

「障害？」友子が恐る恐る繰り返した。素人の友子には運動領とか側頭葉とか言われても今一つピンとこないが、「障害」という言葉には敏感に反応した。「後遺症が残るということですか？」友子は救いを求めるような視線を崎田に投げ返した。

「心配いりません。医学的に言えば後遺症ということになりますが、日常生活は問題なくできるようになるでしょう。もちろん、理学療法、言語療法、作業療法などは必要ですが、頑張って3か月続ければ通常の生活は支障なく行えるところまで回復できます。ただ、今の高度な専門知識を要する職場への復帰は難しいかもしれません。尤も、言葉を音として認識できるようにはなるでしょうが、それが意味することは理解できないかもしれません。」

友子には禅問答のような解説に取り敢えず領くしか術がなかった。

そよかぜ 循環器内科・糖尿病内科  
(県立中央病院 前)

院長 中村陽一